
隣の魔王(18)は侵略者さん

Izumo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣の魔王（18）は侵略者さん

【Nコード】

N2680J

【作者名】

Izumo

【あらすじ】

「世界征服をしましょう」

その一言から、国際的犯罪者達の罪が始まった。
未だ戦争を続ける、世界を相手に。

全五話から成る、ジャンルの定まらない物語です。

第一話：花と華（前書き）

この作品は、作者のリハビリ作品です。

ですので、時々変な文があるかもしれませんが、さりげなくスルーして下さい。

第一話：花と華

別に名残惜しくも無い学び舎にさよならする、高校の卒業式。

それも無事に終え、隣の彼女と二人で桜並木の下を歩いていると、不意に彼女は言った。

卒業証書の入った筒を、後ろ腰に回した両手で掴み、僕と同じ身長を身体をくの字に曲げて、上目遣いで「ねえ、世界征服をしましよう」と。

その日から、僕の立ち位置は完全に決まった。

愛おしい君を支える、共犯者として。

野望が果たされ、その行為が罪と成されなくなる時まで。

視界の中、朝の日差しが大窓から差し込む部屋に、二つの音が響く。

紅茶のティーパックが入ったカップにお湯を注ぐ音と、湯沸かし器がお湯を排出する際の運転音だ。僕の心音も聞こえると面白いなあ。馬鹿め。

白を強調した十二畳程の部屋で場違いなそれを行っている僕は、中央にあるダブルベッドの横に設置された丸いミニテーブルの前で、立ち作業中だ。

本当は茶葉を使って本格的にしたかったんだけど、いかんせん茶葉が無い。茶葉が手に入らないのにティーパックが手に入っているのが何故かは、秘密だ。

とにかく、下ろし立ての黒スーツにお湯が跳ねないようにしつつ、注ぎ終えた湯沸かし器から手を離す。

次いで、一分程の時間を直立不動で待ってからティーパックを取り出し、袋から取り出した角砂糖を一つ投下。

これも、お湯を跳ねらせないようにそっと入れ、スプーンで掻き混ぜる事二十秒。

以上で、一連の作業を終える。

吐息。

面倒とは思わないけど、とりあえず吐息。

合計二回の吐息を終え、紅茶の入ったカップを左手に持ち、ベッドの方へと向いた際に鳴った靴音を聴いて、格好良いなあと感想を内心で述べる。僕の内心は七割方どうでも良い事しか言わないのは、近所でも有名だ。

……本当、どうでも良いなあ。

ともあれ、僕が向いたベッドには、乱れに乱れ、それでも綺麗さを保っているセピアブラウン色の長髪の女の子が、安らかな寝顔で眠っていた。

ベッドの中央を占拠し、羽毛布団を蜂のように丸めて抱き抱えて。

「はは、良い寝顔だ。一眼レフで撮って額縁で飾りたいなあ」

言いながら、僕は彼女の露出した肩を右手で揺らし、声を掛ける。起きてと、起床を促す言葉を何度も掛ける。

するとやがて、揺れと声に気付いたのか、彼女が薄っすらと目を開けた。

「…………んあ…………まぶしい」

目を覚ました彼女は、眠気眼を擦りながら、身を擦った。
うん、彼女は今日も可愛い。

僕はそう内心で喜び、笑みを浮かべた。

すると彼女は、にゅふふつと笑い返してくれた。

そして、僕が持っているカップを見て、小首を傾げる。

ちなみに、発せられる言葉は動作と関係の無い言葉だ。

「あ、私こと神無月^{かんなつき} 花奈に、わざわざ紅茶を入れてくれたんだあ
！ ありがとう、鏡華^{きょうか}！」

「いやいや、これは僕のだよ。欲しかったら自分で入れてね」

「……けちーっ」

花奈はそう言って頬を膨らませ、目を細めた。

ああ、剥れる花奈も可愛いなあ。

思わず抱き締めたくなる衝動をブレーキの壊れた理性でなんとか
抑え、紅茶を一口飲む。

紅茶に含まれる何とか成分は、理性を使った抑制を促進させるの
だ。

……またまたしょーも無い嘘を仰る僕。日本語もちっとおかし
いし。

とりあえず、もう一口。

そして、その紅茶のカップを花奈に差し出した。

すると彼女は、当然の事ながらきょんとし出す。

同時に、瞼をぱちくりさせている。

……我ながら、今日はついで。

朝から花奈の可愛い表情が三つも見れたのだから。

うん、僕は花奈の事となると、惚気ばかり吐いてしまうのだ。

まあ、それはさておき。

とりあえず、彼女を完全に目覚めさせなくては。

故に、カフェインである。効く効かないは関係無しに。

「どうしたの？ 残りは花奈の分だよ。早く飲んで着替えて髪整えないとね。朝礼、遅れちゃうし」

「え？ あ、うん、そうだね。……いじゅわりゅ」

最後のは聞かなかった事にしておき、身体を起こした花奈の手に紅茶のカップを持たせる。

そして、彼女が未だに湯気立つ紅茶を息吹で冷ましている間に、僕はクローゼットへと向かった。

背後、この部屋の出口となる扉の向かって左側にあるその前に立ち、開く。

中に入っているのは、十着程の真っ白なスーツ。純白とも言っねどうでも良いけど。

ちなみに僕が着ている黒いスーツとは、正反対の色を持った衣服だ。

白と黒。

それは、表と裏という意味を持っていて。

互いが互いの正反対であるという事を示す物で。

けれども、それは互いがもっとも近くに居る証であって。

……だから、名前が鏡華なのかも。

花を鏡に映したら見える、華。不思議な事だ。

この名を付けられた時、既にそうなると思っていたかのようだなあ。

「……だって、表と裏だからね」

呟き、疑問に先程と同じ答えを王手してチェックメイト。

あれ？ ゲームが違うな。

また新たに疑問を生みつつ、特に問題視する事では無かった為、

とりあえず一着手に取る。

思わず語りに入ってしまったていた。

切り替え、切り替え。

そう自分に言い聞かせ、真っ白なスーツを持っていない方の手で、クローゼットを閉じた。

次いで、身体を翻してベッドの方へと向けば、その上で花奈が下着姿で直立不動の体勢をとっていた。

準備の早い子だなあ。上手くいけば、NHK教育テレビのお着替え番組に出られるかもしれない。

ベッドの上にカップを置くのは、聊か頂けないが。

ともあれ、満面の笑みで僕を待っている花奈の下へと参上し、早々に着替えを開始した。

まるで執事だが、僕達は一応自他共に認めるカップルである。他というのは花奈の事ね。

部屋を出た瞬間、能天気な花奈の表情は、一瞬にして真面目顔に変わった。

同じく性格も、冷静且つ温情に。

その状態を維持して、廊下を歩き始める。

まあ、いつもの事だ。

自分の素顔と素の性格を見せるのは僕にだけと、彼女の中では法律を超えた憲法として定められている。

いや、DNAに刻まれているのかな？

700ちよいしかないMBの容量に含まれているかもしれないから、光栄だねえ。

差し詰め、1KB以下だろうか。

もし1MB以上だった場合、他の基本的情報が欠如してしまっているのではないかと思い、過去の彼女の行動におかしな点が無いか、記憶の引き出しを念入りに開け放ってみた。

……うん、思い当たる節が多過ぎて困る。

ともあれあれ、今の状態の彼女を何かに例えるなら、モスクワのとある女ボスだ。架空の人物だけど。

ちなみに、僕も自分なりに変えている。敬語になっているだけなんだけどね。

だけでも花奈には、それだけで十分よつと言われたから、問題無しなのだ。

と、そんな事を内心で言っている間に、廊下を歩いていた僕らは誰とも擦れ違わずに終点へと到着した。

目前にあるのは、行く手を阻むような大扉。

軽く十メートルはあるその大扉の前で、僕らは立ち止まる。

袖を少し引いて腕時計を確認すると、二本の針は午前九時ジャストを示している。

「相変わらず、時間は丁度です」

「当然よ。遅刻は土気の低下を意味するから」

凜とした声が、大扉に当たって反射し、廊下に響き渡る。

うん、良い声だ。

「それでは行きましょうか。皆が、待っています」

告げ、僕は両手を使って大扉を押す。

すると、見た目に反して意外と軽い大扉は、外界の光を用意に僕の目に照射させた。

どうやら今日は、晴天らしい。

外へと出て、最初に視界入りしたのは、青い空に白い雲だ。ん、果物名の歌手を思い出した。すぐに忘却。

と、まあそんな遠方を見ての感想はさておき、眼前にはコンクリートで出来た広場があり、作業服であるつなぎを着た男女多数が、整列をして立っていた。

それによつて作られた列の果ては、微かに見えない。

彼らは、表情一つ変える事無く、ただ花奈を見ていた。

それは彼女も同じであり、数歩前へと出て、彼らより少し高い位置となる台の上で停止する。

僕はそれに続き、隣に立って微笑を作る。

暫し、沈黙。

やがて、顔の筋肉がその表情に模られ、普通の表情イコール微笑となりつつあるその時、隣の花奈が息を吸った。

「……この国は、今日で建国二周年を迎える。それは喜ぶべき事であり、ここまで来られた事を皆に感謝すべき事。だからまず、言わせてもらおう。ありがとう」

花奈の正直な感謝の言葉に、作業着姿の彼らは無表情を崩し、それぞれが照れた笑みや申し訳なさそうな表情になった。

……後で、申し訳なさそうになった奴を集めて、粗品をプレゼントしよう。

「今現在、世界は三度目の大戦、第三次世界大戦の真っ最中よ。そんな中で、特殊中立国の一つとして日本が選ばれたから、隣接して

いる私達の国はこうして無事に生きているのかもしれない。でも、いくら日本に隣接しているからと言って、平和ボケをしている訳にはいかないの」

だからと、彼女は言う。

「だから私達は、今は亡き祖父の遺産で、武力を蓄えた。同じ志を持つ企業から、技術を譲り受けた。そして何より、皆に恵まれた。だからこそ、この国は小さいながらにして、大きな力を手に入れたわ。これでやっと、私達の為すべき事を果たす準備が整った」

皆を見渡しながら、マイクも拡声器も使わず、彼女は生声を響かせる。

腹から出す、強く張りのある声は、一番近くに居る僕の鼓膜を破いてしまう程だ。

例えばだから、破れはしないけど。あ、でも花奈にだったら破られても　おっと、脱線だ。

「後少しよ。後少しの最終調整が終わった時、私達は武力と交渉を持って、各国に宣戦布告を行うわ。そしてその果てで、世界征服を成し遂げるわよ！」

まだ波は起こらない。

当たり前だ、まだ話は続くからね。

「けれど、その世界征服は、為すべき事の第一段階よ。そしてそれは、最も過酷なものと成り得るかもしれない。大勢が苦しみ、悲しむかもしれない。でも、私は極力、そのような事を避けたいと思っているわ」

言って、溜息。

あ、今の溜息を聞いて苦笑した人の顔、覚えておこう。
労働時間追加……は労働基準法とやらに引っかかるだろうから、
後で別のを考えておこう。

「甘い、と思っっている者は当然居るでしょうね。だけど、そんな私
についてきたのだから、同罪よ？」

冗談めいた、可愛い表情を見せる花奈。

ちなみに、今苦笑した者達はお咎め無しだ。

基本、僕ルールのTPOに違反していなければ、問題無いのだ。
この基準は社会的には大問題だろうけど、気にしない。

「ともあれ、もうすぐ私達は、戦争に参加する事になるわ。だから、
残りの平和を十分に味わいなさい。たくさん未練を残しなさい！
意地でも、生きて全てを終わらせ、またいつもの平和に戻る為に
ね！ それじゃあ、頑張るのよ！ 以上！！」

刹那、波が来た。

それは、前方に広がる者達が、揃って声を張り上げた事によって
起きたのだ。

皆、それぞれが歓喜を上げ、拳を振り上げている。

もちろん、男女関係無く、だ。

我らが国王はそんな彼らを見据え、微笑ましい表情をしていた。
うん、彼女は絶対女神だね、賭けても良い。

「お疲れ様です。喉が渴いたでしょうから、スポーツ飲料でも如何
ですか？」

「気が利くわね、ありがとう。……ところで、貴方に頼んでおきた
い事があるの」

「何なりと、お申し付け下さい」

言いながら、あらかじめ用意しておいたスポーツ飲料の入ったペットボトルを渡した。

もちろん、直前までクーラーボックスに入れていた為に、冷え冷えた。

真夏にはピッタリだね、うん。今は秋だけど。

時にはちよつと怒った可愛い反応見たさに、意地悪したくなるのだ。

ちなみにそのクーラーボックスは、早朝にこの位置に準備しておいたんだよ。

「冷めたっ！……後で飲んでおくわ」

あ、逃げられた。

「とにかく、私は居住区の視察に行ってくるから、貴方は開発区に行つて現時点での軍事力を簡単に纏めて、後で報告してちょうだいね。良い結果を期待しているわ」

「かしこまりましたあ！！失礼しました。それでは、行つて参ります」

「え？ え、ええ。お願いするわ」

不思議な物　もとい、者を見る目で礼を言う花奈。

まあ、唐突に叫ばれるとそういう反応になるわな。

誰だよ、僕の電腦に多量負荷の掛かるデータを送信して来た奴。

一瞬、目眩と頭痛が器用な共同作業を行つて、ダブルパンチを食らわせて来た。

マイクロコンピュータがの脳と直結して接続されているのだから、少しは加減してほしいなあ。

もしショートしちゃったら、僕の脳が焼ききれちゃうじゃん。

それはさておき、花奈に一度会釈をし、身体を翻して開発区へと向かった。

確か開発区は地下であり最下層で、エレベーターは東棟が近かったな。

内心で確認し、この国で一、二を争うつもりもないだろうがとりあえず高い建物へと向かった。

第二話：武力と兵器

タイル張りのフロアを抜けた先にあるエレベーターホールにて、上昇下降両対応式電動箱部屋を待つ事三分。

古典的な到着音と共に開きましたドアを潜って、棺桶　もとい、エレベーターに入る。いやまあ、これが故障して落下して死んだら、棺桶だろうけども。

縁起でも無い事は、言うべきではないだろう。

ともあれ、中に入った瞬間、一番に目に入ったのは、大型スーパーなどで見かける鏡では無く、この国全体の見取り図だ。

軍艦の形をした陸部分を上部に置いて、地下を下部に、まるで根っこのように広げられたここは、大きく四つの区域に分けられている。

上部から順に、艦橋司令区、商業区、居住区、開発区だ。

そして、僕が今向かっているのは、地下三十階から成って最下層に当たる、開発区。

主に軍事兵器や電化製品を開発・生産しているその場所は、東京ドーム数十個分に値するとか。

もつとも、僕は測る必要も知る必要も無いけどね。

ちなみに、国と称しているここはどこなのか、という自然と不自然に生まれた疑問には、見取り図の上部に書かれた国名が教えてくれる。

「ノーブレス・オブリージュ。フランス語で訳すと、高貴な義務だったかな。で、元・軍艦島^{ワイロ}つと」

昔、花奈の祖父が莫大な富と権力^{ワイロ}で手に入れた軍艦島を増築し、軍事兵器を大量に設置し、地下施設まで造って、亡くなって、拳句の果てにはその娘が意思を継いで二年前、独立国としてここを認定

させた。

ちなみにそれからの一年半、僕と花奈はちゃんと学業に勤しんでいたよ？

ここの指揮は、優秀な部下に任せておいたからね。

……おっと、スイッチを押さなきゃ。いつまで経っても下降しないじゃないか。

ともあれ、今に至っては、生前の祖父を慕っていた者達や花奈に賛同した者達が集い、立派な軍隊を持つ事が出来た。

その上、世界規模の大企業からの後押しもあつて、今や軍事力のかのアメリカに匹敵しているのだ。

スポンサー様様だね、うん。

確実に、花奈の野望である世界征服の下準備が整ってきている。

……時期的にも、丁度良い機会なんだよねえ」

世界は今、戦争をしている。

EU、ロシア連邦、日本を除いたアジア全域、アメリカ合衆国、そして小規模でも無数に存在する武装勢力。

この、一纏めになると五つある勢力は、自国ではなく中東周辺の地域で、戦争を行っている。

大国はビジネスの為に。武装勢力は解放の為に。

それぞれが、己の野望を叶える為に戦っている。

良いじゃん、それ。ねえ？

野望の為に暴力が許されるのだから。

故に、僕達も武力という名の暴力で制すれば良いんだから。

……っと、

「危険思想は駄目、絶対くってね」

花奈の為なら、どんな事でもやってみせるけど。

これ、危険思想じゃ無い……よね？

エレベーターが降下し、それにより起きる浮遊感(?)を楽しむ事、数分。

またしても古典的な到着音が鳴り、ドアが開きますなどというアナウンスが流れる事無く、無音でドアがスライドし、開いた。

それと同時に、僕の視界に人が入り込んだ。

無精髭と白髪が目立つその男は、つなぎの胸ポケットからはみ出た数本の煙草の内、一本だけ抜いて口に銜えた。

何だ？ 僕が来るまで吸うのを我慢してたつてのか？ なんて、思わなきゃ良かった。

ちよつと吐き気。

僕はおっさんなんぞと恋に落ちるつもりなど、微塵も無い。

「良く来たなあ。ちよつと遅いが、まあ良いだろうて。 ようこそ、ゴミ箱へ」

低い声で失礼な事を言う彼は、逆の胸ポケットからオイルライターを取り出して、煙草に火を点した。

メンソールの匂い もとい、臭いのする煙が、僕に吹き掛けられる。

吐き気倍増。

僕は煙草とおっさんは嫌いなのだ。

「……相変わらず、言葉と言動が反対ですね、老けた三十路さん。歓迎されている感じが全くしません」

「おいおい、お前さんの脳はもう呆けちまったのかよ。やっぱり日頃の行いが変だと呆け易くなるんだな、二十歳の御老体」

「ボケてません老いてませんピチピチの若者です。さて、おっさんの御託に付き合ってる暇はありません。用件は既に伝わっているでしょう?」

「へいへい、聞いてるよ聞いてるよ。嫌という位、念入りにな」

「あれ? それ程までにしつこく連絡は入れてなかった筈ですが。記憶混乱ですか? 認知症ですか?」

馬鹿にしたような言い方で問うと、うるせえの一言で話は終わった。

逃げたな、うん。

彼、那須 太郎(30)は、この開発区いわゆるの所謂工場長という役職で、仕事は真面目だけど、会話は不真面目な人である。

けれど、そんな彼だからこそか、人望というものが呪い効果付きで強制装備されるのだ。

これを外すのは彼が煙草を止める事よりも難しいだろう。

……つと、そういえば。

「太郎さん。先程、僕の電腦に何か送信しましたか?」

既に身体を翻し、歩き出そうとしていた太郎は止まり、上半身だけをこちらに向けて来た。

目が輝いている。滅多に使わない言葉だけど、気持ち悪いって言わせて貰いたい。

「ああ、送ったぞ! 先日、大ファンなんだと話したジョン・レノンのベストアルバムをmp3形式で大量にだ!」

「そうだったんですか！　なら良かったです！」

「聴いたのか！？　エレベーターの中で聴いたびじゃ！？」

「ははは、いえいえ。さり気無く削除させて頂きました」

衝撃なのは分からない真実を告げた瞬間、輝いていた太郎の目は絶望の色に染まり、口があんぐりと開いた。でも、器用に煙草は落とさない。不思議！

ってか、今なら拳が入るね、入れないけど。

だが突然、彼の表情が無に変わる。

「まあ、本当は報告書なんだけどな。上の奴らに送信するのが面倒臭いから、送受信履歴の一番上にあったお前の名に送ったんだ」

「……あ、確かにこれ、報告書ですね。では、後で読ませていただきます」

「お前……次は必ずジョン・レノンを送るから……　　つと、そんじやついて来い。状況報告だ、状況報告」

言つて、無駄話を再度終わらせ、歩き出した。

彼が進む先には、自動ドアが見える。

そこを超えれば、開発区だ。

この国の力が、集う場所。

僕はそこへ行つて、最終チェックをするのだ。

花奈に説明する為にね。

そう考えていると突然、太郎が振り向かず一文だけ発した。

「ちなみに俺は太郎じゃねえ、理責^{りき}だ」

あれ？　また間違えた？

嫌な病気だなあ。あ、認知症じゃないよ？

とりあえず、頭を小突いておく。

機械の稼働音や人の大声、ハンマーの打撃音などが聞こえることは開発区の中核近く。

実況はお馴染み、僕こと鏡華がお送りしております。

とりあえず、架空のマイクを投げ捨てて、周囲を見渡した。

僕が今歩いているのは、鉄の音が良く響く、天井から吊り下げられた鉄板の通路だ。

それも、ドーム状の広大な開発区の上に張り巡らされた手摺り付きの通路。

ビルの階数で例えれば、三十階分は優に超えているだろう。

高い、とにかく高い。

下を見れば、人がゴミのように小さかった。

別に高所恐怖症でも、天空城の王になったつもりでも無いけど。

でも、ヒュンってなった。

などと考えていたら、理責が唐突に真下に向かって人差し指を向けた。

釣られて見ればそこには、巨大な潜水艦のような兵器があった。

シャープペンシルみたいな形だ。

「ほれ、あれだ。我らがお嬢の旗艦？クリミナル？。ADを採用した、極秘最新鋭技術の塊だぜ」

AD？ 何それ？

疑問が生まれたのと同時に、自然と先程の報告書に検索をかけていた。

そして、刹那で結果が出る。

視界の片隅に、一箇所がピックアップされた半透明の報告書が浮かび上がる。

ちなみにこれは、脳の視覚認識機能に電腦が働き掛け、あたかもそこにあつて見えているかのようにされているのだ。

最新技術つて、すげーよ？

「ああ、反重力装置ですか。Anti-gravity DeviceでAD……正しい気がしますね、分かり辛いですね。職業を連想しますよ」

「え？ 俺は西暦を連想してたんだが……」

これが年の違いですか、という言葉は喉で止めた。
そして、代わりの言葉を喉で変換して確定、発声した。

「ADの使用によつて、飛行航行が可能とありますが……航空機ですか？」

「もしかして、お前が想像しているのは旅客機みたいな奴か？ そんなんじゃないよ。浮くんだよ、航空艦だ」

「……ゲームとかに出てくる、飛行戦艦を想像すれば良いんですか？」

「その通りだ。かなりのサイズだから、相手に戦慄を与えるぜ、絶対」

自信満々に胸を張る理責を尻目に、僕は手摺りを掴み、もう一度目下にある巨大な鉄の塊を見据える。

……技術は進歩したなあ。

ついこの間、核を使った小型の核融合炉を機械の動力源にするのに成功したばかりだと思っていたのに。

おかげで現在の戦争では、核爆弾を一つも使われていない、というのは余談として扱っておく。

まあ、核爆弾なんて使ったらビジネスなんて出来ないだろうからね。

確か、戦争で武器が減るから、武器の入手経路が少ない武装集団に売り捌いて利益を得ている軍があるとか。

トップシークレットクラスの情報らしいけど、何故知る事が出来たのかは敢えてスルーしておこう。

でも、他のビジネス方法は知らないなあ。

知ろうとしていないだけだというのは秘密だ。トップシークレットね。

ともあれ、新聞はちゃんと読まないといけないねってのが今日の教訓だな、うん。

「どうだ？ 中に入って艦橋内でも見るか？」

「ええ、是非。花奈が入っても大丈夫かどうかチェック致しますので」

「俺達技術者を信用してねえセリフだな」

睨みのきいた半目が、僕に向けられた。

周囲から何人かの睨む視線を感じ取れるが、気のせいだろう。今更ながらの品定めであると、勝手に解釈しておく。

「まさか、滅相も無い。信用していなかったら、僕が直接視察には来ませんよ。ええ、そりゃあもう、全部代理に任せていましたね」

花奈が怒るから、絶対にそんな事しないけど。

とりあえず、彼女が座る艦長席が、オーダーメイドの高級製だったら文句無しだね。

もしそうじゃなかったら、絶対に乗せないよ。本人が何と言おうと。

「まあ良い。案内してやるからついて来い」

言いながら、理責は大腿で歩き出した。

わざと力強く踏む足音が、近くに居る僕にとって五月蠅く感じた。その歩き方が、照れているからか怒っているからかは、分からなかったけど。

かなり歩いて到着したエレベーターで下へ参ると、直接艦橋に入る形となっていた。

どうやら、上部のハッチとドッキング状態になっているらしい。扉がスライドして開き、視界に入ったそのエリアは、奥行きのある長方形で、白を強調した床と天井になっており、丁度真正面に当たる位置にフロントガラスがあった。

横に長く、弧を描くようにして僅かに曲がっているそれは、現在は開発区の一部が見える状態になっている。

多分、外へと出たら青い空の良い景色が見えるんだろうなあ。

また、その上部には大型の液晶モニターが二台設置されており、それらを見やすい位置となる大体中央付近、人一人分高い段差の上に艦長席があった。

次いで、その周囲の壁際には多数のモニターと操作パネル、固定式オフィスチェアがいくつも設置されている。

オペレーターや索敵班、艦内外機器の管理班の席だろう。

そして、艦長席の前方、一段下には二席の固定式オフィスチェアと、左側には旅客機特有のハンドルやレバー、右側には一枚の大きなパネルが設置されていた。

「左が操縦席だとしたら、左は……副艦長席ですか」

「おう、その通りだ。この際、副艦長席に座ってみないか？ 副艦長さんよお」

「あれ、僕が副艦長なんですか？」

あ、馬鹿にしたような目。

「やだなあ、僕の後ろに何か見えるんですか？」なんて言葉はもちろん言わない。

今の僕は、表面上だけ真面目なのだ。

内面はこの通りだけど。

「では、お言葉に甘えて」

先程の副艦長がどうかっという会話は無かった事のようにして進め、左右にある通路の右側を行き、副艦長席へと向かった。

……出入口から見たら気付かなかったけど、斜面になっているんだなあ。

理責の事だから、床にオイルでも塗ってるんじゃないか、と思い注意深く進み、やっとの事で到着。

結局、オイルは塗って無かった。

その代わりとしてなのか、見知らぬ女性が視界に入った。

ちなみに僕は、名前は覚えが悪くても、顔は一度会話しただけでずっと覚えていられる。

アンバランスな脳なのだ。

とりあえず、おや？つと言う、初対面時には定番の台詞を放っておく。

すると、彼女は会釈し、微笑を見せた。

あ、良く見ると可愛い。もちろん、花奈程ではないがねえ、ふふ。

バニラ色の長髪が腰まで伸びている彼女は小柄で、それに比例して顔も小さく、しかし目はぱっちりした大き目のブルーカラーだ。そして服装は、白を基礎に黒と赤のラインが入った制服で、女性の場合はスカートらしい。

しかし、僕は気になったのは別の事。

何故、操縦席に座っているか、だ。

まさかとは思うけど、操縦士なのか？

いやいや、もしかしたらオペレーターかもしれない。

などと考えていると、彼女は僕の疑問混じりの視線に気付いたのか、もう一度会釈。

礼儀正しい子ってとこだね、うん。

「えと、こうして話すのは初めてですね。私は本艦の操縦士に任命されました、御坂^{みさか} 優衣^{ゆうい}です」

「これはご丁寧に。俺は副艦長を勤めさせて頂く、花奈総帥の側近、鏡華です。お隣さんという事で、今後ともよろしくお願いします」

こちらこそ、と言って微笑む彼女は、俺の後ろに居るであろう理貴を見やった。

ついでとして、俺も後ろへと振り向いて理貴を見る。

「理貴さん、副艦長が来たって事は、モニターを使うんですか？」

「ああ、そうだ。すまないが、起動してくれ」

「了解しました。それでは、少々お待ち下さい」

言って、優衣は副艦長席に移り、パネルを操作し始めた。

彼女が数回タッチすると、フロントガラスと副艦長席の丁度真ん中にあつた円錐型の装置が音を立てて起動した。

次いで、上部に光を灯したそれは、天井から降りて来たスポットライトのような装置の光を受け、立体的な何かを浮かび上がらせた。例えるなら、シャープペンシルだ。

ああ、良く見ればクリミナルっていう航空艦かあ。

……ってか、まず円錐型の装置がある事に気付かなかった。

「これが、クリミナルの全体図を3D化した物だ。説明は今見える、赤いポインターで行う」

「何かと思えば、立体映像装置ですか。また無駄な物に予算を注ぎ込みましたね」

「うるせえ、貰った金は出来るだけ最新技術に回すのが、俺のやり方だ」

「灰はいそいでしたねすみませんでしたごめんなさい。それで、何を説明したいんですか？」

「棒読みつてのは本当、腹立つな。 とりあえずは、艦の武装を一通り説明しておく」

言いながら、理責は優衣と副艦長席と交代し、パネルを操作した。すると、艦後部の上に出っ張った艦橋部分にあつた赤いポインタ―が、艦の先端部分へと移った。

引き続き、シャープペンシルを見ながら、ご想像下さい。

艦橋はクリップ部分、と言った感じでね。

ちなみに、先端には大のつく砲は付いてないよ、多分。

「本艦に設置されている武装は、全て収納型でな。砲門を展開しないと使えない事になっている。まあ、相手から武装が特定出来ないから問題無いがな、はっはっはっ」

笑う彼は、まるでおっさんだった。

実際おっさんなのだけれども、それを言つとこのおっさん！つと馬鹿に出来ない為、敢えて言わない。自覚は不要だ。

そんな事を考えている間に、ポインターは先端から三分の一位まで後退した。

例えば、グリップ部分。

「ここには、縦のラインに沿って上と下にそれぞれ、三連式の砲門が四門設置されている。合計、八門つてとこだな。で、両脇には収納型の25・5mm機関銃が二十門設置されている。対地空迎撃は完璧だ。相手がアサルトでも所有してなければ、な」

侵略兵器としては、十分な役割を果たす装備が既に成されている為、上出来ですと先に評価しておく。

故に、後の説明に関して駄目出しする部分は無いだろうなと判断するが、一応として話は聞いておく。

そして時は動き出し、ポインターも動き出した。

示すのは、グリップとクリップの間となった。

「ここには、側面に大型砲門を一門ずつ設置した。多種多様な弾を撃てるように内部装填式にした、電磁^{レールガン}投射砲だ。ただ、大型だから撃つた後は再装填の前に、冷却を必要とする。だから、ここぞという場面で使用する事をお勧めするぜ？」

「長々とお疲れ様です。まだ途中ですが、お身体に応えたでしょうから、休憩なさつては如何でしょうか？」

「まだまだ現役だつ。……艦橋部分の説明はまだだが、良いのか？」

「ええ、もう十分ですよ。後の細かい所は、報告書を見て整理しておきますから。あ、どうもありがとうございます」

いつの間にか、紙コップ一杯分のお茶を人数分持つて来ていた優衣に感謝し、一つ頂く。

ん、温かい。

悴んだ手には持つて来いだね。寒くないけど。

けれども、良い感じに暖かい室内で飲む温かいお茶も、悪く無いなあ。

美味なり。

「それじゃ最後に、お前さんが要求して来たアサルトでも見に行くか？ 格納庫に収まっているからな」

「それでは、見に行きましょうか。では優衣、また後程」

「はい！ あ、えと……お会い出来て光栄です！」

それは最初に言うんじゃないかな、という意地悪な言葉は放たず、会釈だけしておく。

お世辞でも本音でも、嬉しい言葉だったからね。

それ相応の態度を取るのが、上司らしさってもんだ。

と、そんな風に上手く纏め、艦橋を後にした。

次は僕の力を代行する物を見る。

理貴に案内された場所は、巨大な隔壁の先にあった。

ちなみにそれまでの道のりは、迷路のような通路を通ったが為に、説明を省かせて頂く。

右行つて左行つてまた左行つて次は右行つて……なんて説明、聞くだけ無駄だろうから。

もつとも、一人で来る機会など無いだろうから、覚える必要は無

いんだけどね。

そんな事はおいといて、現在足を踏み入れている格納庫には、一機の人型兵器が置かれていた。

全長は、僕の電脳で計測する限りでは十五メートルと言った所か。黒一色のフレームが特徴的なそれは、直立状態でカタパルトに固定されていた。

……半人型巨大戦術兵器？アサルト？。

それが僕の知る、開戦の一年前に登場した兵器の名だ。

動力源が核融合炉であり、当時世界一の核保有国となっていた北朝鮮が核爆弾を解体してそれを大量生産、世界各国に売り捌いた事で、既に上昇を始めていた名は一気に上がった。もう鰻上り。

戦車の次に陸上を制する兵器として需要のあったそれはコストが高いものの、信頼性は遥かに高かった。

戦争中の核爆弾不使用を暗黙の了解とした理由の一つとも言えるな、うん。

全長二十メートルの鉄塊。

上半身は人型に、下半身はキャタピラーや四脚、ホバークラフトなど国によって改良が加えられたそれを、この国も導入するという話が進んでいた。

だがしかし、目の前にあるのは全長が五メートル低く、二足歩行型だ。

正直、初めて見る。

本当にアサルトなのか不明だが、理責は艦橋でアサルトを見に行くかと言った為、これは本物だろう。MSかと思った。サイズからして、Gかな。

「……驚いてるな？ そりゃそうだ。こいつはスポンサーが特別提供してくれた、最新技術の結晶だ。世界初の二足歩行に、安定した姿勢。全長の縮小化に、各関節部位にブースターの設置。従来のアサルトとは、ザクとガンダム位の差だぜ」

「随分とはつきり言ってますが、ザクだって色が変わればそれなりに互角でしたよ？ 赤とか赤とか」

「赤だけじゃねえか。まあとにかく、高機動型だって訳だ。操作全般はシュミレーションで慣れてもらいたいから、乗ってもらえるか？」

問われ、しかし返答は既に用意してあった。

無言で頷く。

すると理貴は、りょーかいりょーかいと呟きながら、先に進んで行った。

……これが僕の力。

そう内心で呟き、歓喜の声を押さえ込む。
とりあえず、シュミレーションだ。

『どうだ？ 息苦しく無いか？』

声と共にモニターの電源が入り、暗闇に居た僕の目を刺激する。
眩しい。

天空の王みたいなりアクションは得とくしていない為、目を細めるだけで難を逃れておく。

しかし、次の瞬間には周囲のLEDライトに光が灯り、機内が明るくなった。

僕が今乗っているアサルト内部の操縦席は、思ったより狭い。明るくなって見渡せる機内は、例えるなら浴槽だ。

一人が丁度入れるスペースで、尚且つ斜めに差し込まれている感じ。

あ、浴槽が、だよ？

でも、エントリー何とかとは違い、液体は流し込まれていない。

そして、狭いが為にレバーやスイッチが一つも無かった。

唯一ある目のモニターも、外界を見る為の物では無く、通信用らしい。それも、シュミレーション時のみ。

実戦では、モニターさえ付けないそうだ。

何でも、この機体の操作は全て電脳で行うらしく、故に機器は要らないという訳だ。

「殺風景という言葉以外、何の文句もありませんよ」

「そりやどうしようも無い要求だな。操縦席が狭いのは我慢して欲しい」

「その理由って、やっぱりあるんですか？」

「もちろんだ。操縦席が小さいのは、出来るだけ内装を駆動系機関で埋めたかったんだ。なんせ、各関節部位にブースターを付けたくらいだからな。それに耐え得る柔軟性と、搭乗者を強力なGから保護する為のAD機関をどうしても搭載したかった。だから、必然的に狭くなっちゃったんだ」

一通り説明が終わると、通信が切れた。

歳だから、給水タイムだろうか。

とりあえず、おつかれさまと通信が再開される前に言うておく。

「まさか礼の言葉が、お前さんから放出されるとはな」

聞こえていた。

質の悪い人だ。画面だけ切って通信はそのままに、だなんて。

『ちなみに、だ。核融合炉はお前さんの丁度真後ろにある。半永久バッテリーだからな、好きなだけ動き回って良いぞ』

「頼もしいですね。大破した際に核爆発が起きなければ完璧ですけど」

『お前は、今更何言ってるんだよ。核融合炉は大破寸前や本体に損傷があった場合、自動で停止するんだよ。もちろん、手動も可能だ』

途轍もなく便利な物だ。

別に、だからと言って大破しに行くつもりは無いけど。

わざわざ大破しに行く強者は羽付きのあいっただけで十分だ。

『さて、それじゃ起動するか。今からお前の電腦とアサルトのシステムを同期させる。少し疲れるだろうが、我慢しろな』

言葉と共に、それが来た。

脳に、電腦に情報が近距離のワイヤレス通信で流れ込んで来る。

目を開けていれば半透明の、瞑っていればはっきりと見える多数のウィンドウ。

開いては閉じ、また開いては閉じられるそれは無数にあり、されど一つ一つのメモリーは然程重くない。

どうやら、報告書と共にインストールソフトも受信していたのだろう。

圧縮されてたから気付かなかった。

ともあれ、しばらくそれが続いた後、仮想空間接続を問われた。
? Yes? と? No? が返答を待っている。

ちなみに仮想空間とは、電腦の感覚神経をネットワーク内で構成された仮想空間で行動可能な擬似人体に移す事だ。

簡単に言えば、もう一つの世界に入るという事。別の部屋に居る

もう一人の自分を操作するって事だね。

それにより、ネットサーフィンなどのインターネット利用がリアル化したのだ。

さすが2045年！ よつ2045！

今回はどうやら、仮想空間内に操縦席が創造されているらしい。

故にもちろん、Yesだ。

刹那、視界一面にクリアモニターが展開され、違和感のある両手を見れば、機械の腕になっていた。

……アサルトとの、感覚リンクか。

『脳の感覚神経をアサルトとリンクしたんだ。今や四肢も頭部もブースターも、全てがお前さんと一心同体』

「よく、そんな事が出来ましたね。リンクだなんて凄い事」

『ん、ああ……人間の脳は元々スーパーコンピュータさえも超える量子だ。それと同期させる為には、同等の物が必要となる』

量子、量子論。量子力学とも言ったか。

確か、物事の情報をあれかもしれない、これかもしれないと考えを重ね合わせ、物事を並列に複数考える事が出来るという事だ。

ああ、簡単な言葉があった。

自我だ。

通常、コンピュータは答えを導き出す事だけをし、しかもしれは人が作り出した、物事を処理する為の過程がなければならぬ。

自ら考えて成長する事が出来ない。すなわち、自我なんて持っていない。

人間と機械の違いが証明される、証拠の一つと言っても良いだろう。

だが、理貴が言う、量子である脳と同期させる同等の物を用意出来たとするならば……。

「量子コンピュータを利用したAI。自我のある機体。人間？」

『自我には成長制限を掛けてあるがな。自我を持つちまったAIを自由に成長させちまったら、ジーンとミームのバランスが悪いせいで、肉体の無い己から見る人間への価値観は、肉体いらねえよって結果になって、架空の戦争が実現しちゃう』

「スカイネットの奴ですね。名作映画集で6まで全部見ました。ドラマは見えていませんが」

『馬鹿野郎！ ドラマはドラマで面白いんだぜ！？』

「ここらで話を戻しませんか？」

ぐつという、言葉を詰まらせた声がし、暫しの静寂。

大方、お前が話を振ったんだろうが！ っという怒りを押し殺しているのだろう。

しかし、声に出さない分、詰まらない男である。

せつかく、乗る方が悪いっというベストな返し言葉を用意していたというのに。

ともあれ、このまま何もしない状況が続く気がしたので、話を切り出そう。

「とりあえず、セッティングが終わっているようなので、そろそろ出して貰っていいですか？」

『んあ？ 模擬戦はやらなくて良いのか？』

間抜けな声で問いに問いを返して来た理貴。

ちなみに、この声はアサルトとリンクした時から脳内に響く仕様になっている。

腹立たしさ倍増だ。

「いえ、良いです。武装なども報告書で確認しておきますよ」

良いながら、システムを弄ってみる。

意識するだけでウィンドウが操作出来るのだから、やっぱりコンピュータは便利だ。

そうしている間に電源は切られ、理貴からシミュレーション終了の言葉を頂いた。

ああ、脳が休養を求めているよ。

第三話：国王と国民

そういえば、量子コンピュータを利用したAIは、成長を行う過程で人間がそれなりの育て方をすれば、問題は起きない筈。

量子は考える能力、つまり自我を持ったAIは人間そのもの。

尚且つ、それらの過程で作られたばかりのAIは、生まれたての赤ん坊と変わらない。

知識が無い。だから、知識を与えてあげなくちゃいけない。

それが、育てるという事。

また、それによって人間と触れ合い、まともな人格が形成されれば、肉体なんぞ要らんわーって考えは不成立……あれ？

どちらにせよ、自分を人と認識するんだよね？

だったら、肉体の無い自分から見た人間は、不自由極まりない存在と認識して……。

でもでも、それでもAIがそれでも良いという考えに到達すれば、何も起きないんじゃない？

堂々巡りするな、これ。

よくよく考えたら、その結果の例が昔遭ったな、と数年前の事件を思い出す僕は今現在、居住区内でジープを乗り回している。

いや別に、迷惑行為をしてる訳じゃないよ？

まあ、理由は簡単、花奈に会いに行く為だ。

その為、今までの思考には休暇を与え、彼女を探す事に専念する。

「にしても、一段と居住区らしくなりましたなあ」

少し前まで、事務業に追われていたから、暫く見に来れなかったせいで忘れていただけかもしれないけれど。

呟きながら、徐行運転に切り替えて、ゆっくりと流れる周囲の景色に目をやる。

それらは地上の、日本の町並みと何ら変わりは無かった。

団地の如く並ぶマンションやコンビニエンスストア、書店や飲食店、娯楽施設などなど、これといって不自由の無い施設の数々。

唯一ある住民の不満としては、天井が殺風景だという事だけだったな。

けれども、対処策は既に打ってある訳で。

液晶ポスターを一面に貼り付けて、外の空を映し出すという計画の提案で、不満は減った。

後は実行するだけだね、うん。

ところで、閑話休題って言葉は便利だなあ。

それはさておきって言葉の方が自然で良いけど。

二つとも同じ意味だしね。

それはさておき、閑話休題。

「話が進みませんよ……。使い方が滅茶苦茶ですし」

とりあえず、声に出して自分に突っ込み。

まあ、話を進めるも何も、目的は果たされたけどね。

花奈を見つけた。

彼女は噴水のある広場で、民衆に囲まれていた。

あ、悪い意味じゃ無いよ？

取り囲んでいる民衆というのは、近所の子供達だ。

「次はこの前のお話してよー」「だめだよ、おねーちゃんはおにぎりっこするのっ」「こんどぼくにぶじゅつってやつおしえて?」「ねーちゃんおっぱいでけー」「けっこんしてください!」

最後の二人は聞き捨てならない。

とりあえず、ジープのエンジンを止めてから降り、Cカップ少女の下へと歩み寄った。

その瞬間、

「ああ、鏡華か。おつか」「あー！ おにーちゃんだ！」「ひさしぶりだひさしぶりだあ！」「おにーちゃん、こんどぼくにぶじゅつつてやつおしえてー」

子供達は、花奈の言葉を遮って、数人が僕の方へと流れて来た。

そして、あつという間に花奈と僕は子供達に包囲されてしまった。つてか、武術の君、金髪君。

君はさつきからなんなのだ。

おかげで先程の二人が誰なのか分からなくなっただじゃないか。

まあ、良いけど。

とりあえず子供達には、適当に相手をしておく。

ちなみに何故、花奈が子供達に囲まれているのか。

答えは簡単だ。

彼女は人気者なのだ、単純に。

そりやもう、ヤキモチを焼きたくなる位に。

きー。

優しさの基準値が高めの彼女は、人間関係に階級を、身分を持ち込んだりせず、しょっちゅう居住区に顔を出している。

そのせいで、僕は事務業に追われていたんだけどね。

でも、花奈の為だから文句は言わないよ。

文句なんてないからねっ。

ともあれ、だから彼女は国民から人望が厚いのだ。

ジャンヌ・ダルクのようにはなっただけじゃないが。

守ろうとした民衆に殺されるだなんて、あつてほしく無いしね。

「本日も楽しそうですね。保護者の方々が感謝する理由を、改めて知りました」

「私に感謝？ それは嬉しい事ね。でも、どういう形でかしら？ 直接言われた事はあまり無いのだけれども」

「毎日、お手紙が届いており、デスクに置かせて頂いております。それを花奈は、読まずに引き出しへと入れていた筈です」

「……もしかして、あの山のような手紙が、全部保護者から……？」

啞然としている花奈の表情、頂き！

記憶のフォトアルバムに、また一枚追加つと。

……ってか、今時手紙だなんて。

メールで送れば良いと思うが、そういえば花奈のアドレスは公開してなかったなと気付く。

今度、専用のメールサーバーを開設しなきゃな。

「もちろんです。あ、大丈夫ですよ。全部、僕が読んでお返事も出していますので」

「そうなの！？ あ、ありがとう」

「おにーちゃんはまめなのだー！」「だー！」

双子でも無いのに、息の合った褒め言葉をありがとう。

そう内心で感謝しつつ、二人の子供の頭を撫でる。

すると二人は、嬉しそうな笑顔を僕に見せてくれた。

まるで天使だねえ。

あ、ちなみに花奈は女神ね。

神々しい組み合わせである。

だったら僕は、神父と言った所かな。

でもそうになると、過去に？変態神父？なる言葉を考え出した人は鬼畜だねえ。

僕イコール変態という事になって、一気に立場が危くなる。

「ところで鏡華。今から皆でかくれんぼをしようという提案があるのだけれども、貴方も参加しない？ もちろん貴方が最初の鬼で」

僕の妄想を無意識に遮った花奈は、労働を提案して来た。それも、子供達の事を考慮して、かくれんぼだとさ。

「分かりました。ですが、ダンボールでも使わない限りは、僕の中から逃れる事は出来ませんよ?」

「子供達をなめちゃいけないわよ。何せ、彼らはここら一体を知り尽くしているのだから。……それじゃあ、三分数えなさい。もういいかい、なんて問いは要らないわ」

「にーちゃんふぁいとー!」

「そういんしゅつげきー!」

元氣一杯の声を合図に、子供達は四方へと散って行った。

……範囲が広いなあ。

全員捕獲したら、缶蹴りに変更してもらおう。

そう内心で決意し、腕時計を見る。

時刻は昼前の十一時。

どうやら、缶蹴りよりも先に朝食の摂取が必要なようだ。

とりあえず、三分間待つてやろう。

「相変わらず素敵ライフを送っているね、キョウ」

横から突然、声が来た。

それは女の、透き通ったような美声。

振り向けば、見知った顔の女が立っていた。

「おや、いつの間に帰って来ていたんですか? スパイさん」

「ついさっきだよ。お迎えが無かったから寂しかったなあ」

「定期連絡も帰還報告もないスパイさんには、当然の事だとは思いますが? 毎回女を作る事を除けば、ジェームズ・ボンドの方が余程優秀ですよ」

「酷い！ 私をあんな女つたらしと一緒にするの！？」

「一緒にしてませんよ、日本語が通じないんですか？ 語尾に何か付けないと通じないんですね」

「にやって付けないと通じないんだにや」

「ちゃんと通じてるじゃないですか。何を今更、追加設定してるんですか」

「にやにを言ってるのか分からにやいんだにやー」

「……とりあえず、普通に帰って下さいにや」

「にやに！？ まさか本当に言うなんて！ はっ！ 本当は言ってみたかったから、良い機会だと思つてたり！？ キョウ、恐ろしい子！」

溜息。

深い溜息。

吐息。

深呼吸。

「とりあえず、任務ご苦労様です」

「はいはい！ お褒めいただきありがとうございます」

言いながら、彼女はミント一色の短髪を人差し指で掻いた。

つと、良く見れば彼女はライダースーツという、外着のままだった。

ぴつちり締まったその黒いスーツが、彼女のボデーラインを包み隠さず表している。

一言で言えば、無い乳だ。

何故、貧乳なのに女スパイとして活動出来ているのかは謎である。

本人曰く、無い方が動き易いとな。

どうでも良いけどね。

つまりは、閑話休題。

「で、どうでしたか？ あちらの国は」

「うーん、見事にスツカス力だったよ。最近、前任だった大統領が行方不明になっちゃって、急遽人が変わったじゃない？ だから、交渉は楽だったんだ。でもね、問題点もあつたんだよ」

「問題点、ですか。もしかして、それを解決せずに戻って来たのですか？」

「待った待った、もちろん解決して来たよう。いやね、現任の大統領のボディガードさんが問題だったんだけどね。まあ、あまり話しに関わろうとすると減給するっていう条件を縛り付けといたけど」

ふむ、舌を出すというお茶目な表情とは裏腹に、恐ろしい事を言う女性だ。

しかし、問題のあるボディガード、か。

誰かと問う事は許されるだろうか。

まあ、彼女の事だから無理だろうな。

「ちなみにそのボ」

「それじゃ、そろそろ諜報部に行くね。任務報告をしてこないとじゃねっ！」

無理だった。

彼女は、すちゃっという効果音が聞こえそうな程素早く、揃えた人差し指と中指を蟀谷付近に構え、ウインク一つ。

そして、エレベーターのある方へそそくさと走って行った。全く、毎回忙しい女性だ。

とりあえず、さてつと呟いておき、スーツの内ポケットに手を突っ込む。

そこからGPS追跡装置を取り出し、電源を入れた。するとモニターに光が宿り、周辺の地図と赤いポインターが表示

された。

「最初は、花奈が鬼になってもらおうかな」

僕は鬼だね、こりゃ。二つの意味で。

それじゃあま、始めますか。

既にかくれんぼじゃなく、鬼ごっこになっているのは秘密だ。

第四話：戦争と栄光

初めまして、だな。俺はK04067。えと、本名は最初は、嬉しかった。

……こんにちは。……んと……G68300……です。あ、

でもこれは記号で、本名は次第に、疑問が生まれた。

H43307だ。本名？ 言うてどうする？ じゃあな

やっと、確信を持てた。

でも既に、手遅れだった。

……僕はまるで、死神だ。

知った者が次々と死んでいくから。

頭痛。幻聴。嘔吐。倦怠。幻覚。目眩。

全てが僕を苦しめる。

そして、僕を救い出したあの人も。

ああああああああああああああああああああああ

結局は僕の前で、僕のせいだ。

ああああああああああああああああああああああ

死んだ。

「ああああああああああああああああああああ！！」

声が喉から外へと突き抜ける。

眠っていた意識を起こしたそれは痛みを伴わせ、やがて声は嘎れ始める。

それでも声は止まない。
耳に残り始めても。
頭に響き始めても。
僕は叫ぶのを止めない。

「ああああああああああああああああああ！！」

ここは何処だ。

僕は誰だ。

これは何だ。

今意識あるこの身体は何だ。

邪魔だ。

壊れちまえ。

まずは目だ。

指を添えろ。

同時に爪を立て

「　　っ！？」

身体を、誰かに抱かれた。

長く細い腕が、僕の身体に巻き付くようにして締めてくる。

少し痛いけど……なんだろう。

見れば、女の子。

暗闇でも見える笑みを浮かべている、女の子。

……ああ、花奈か。

愛おしい花奈が、ここに居る。

「大丈夫……私は生きているから。鏡華の側に居ても……生きていくから」

優しい声がする。

その瞬間、我が帰って来た。
周囲は暗闇。

しかし、月の光が大窓に掛かったカーテンの隙間から、僕らを照らしている。

ああ、だから花奈の笑みが見えたのか。

そんな僕らは同じベッドの上に居て、身体を起こしている僕に花奈が抱きついていて。

以上、現状報告終了つと。

「あ……ごめ、ごめん……また。また……」

掠れた声で謝罪する。

すると彼女は、笑顔で首を振った。

「謝る事無いよ。もう慣れっこだから。大丈夫、大丈夫」

言いながら、花奈は僕の頭を胸元で浅く抱いた。

そのままゆつくりとベッドに、枕に倒れ込む。

額が彼女の首元に当たり、肌と肌が触れ合う。

温かい。暖かい。あたたかい。

心が落ち着く。

優しさが僕を包む。

ああ、感謝しなくっちゃ。

思いながら、想いながら眠りに入る。

今度は悪夢を見ないよう、花奈を浅く抱き返しながら。

彼女は隣に立っていた。

凜とした姿を、国民に見せながら、腕を組んで立っている。

僕達は今、広場でまた国民の軍勢を目の前にしていた。

三日前に行った朝礼とはまた違う、緊張感のある空気を漂わせて、当然の事と言えば、当然なのだが。

だからこそ、皆は緊張する。

今日が全ての始まりであり、今までが終わる日だからだ。

故に服装もつなぎでは無く、正装。

言い換えれば、制服だね。

白をベースに、黒と赤のラインが走っている、この国の制服。

胸元には国旗のバッジ。

肩には階級を示すバッジが付けられている。

さて、状況確認はここまでだ。

腕時計を見れば、午前十時。

始まりの時刻だ。

「……この声を、皆はちゃんと聞いているわね？」 本日、私達

は全ての始まりを迎える。世界征服という名の下に、武力制圧を完遂させるわ。そして最初の標的は、日本よ」

決意の籠った力強い声は、胸元の襟に付けられている小型マイクによって、島全体に伝えられる。

キーンっという、独特の音が響かないか心配だ。

花奈の美声が途切れちゃうもんね。

「決行は一時間後、午前十一時。その時間をもって、私達は国会議事堂に向かうわ。先陣を切って航行するのは旗艦のクリミナル一隻よって、地上部隊はクリミナルからの降下から作戦開始となる。対して、日本の自衛隊は隠し持っていたアサルトを導入してくるでしょうね。その際には、悪く行けば大きな損害が出るかもしれない」

それでも、

「それでも、貴方達には全力で戦って貰いたいのだ。……これは、私の我儘に聞こえるかもしれないわ。仕方の無いことよ。けれど、私達はやり遂げなくてはいけないの。全ては世界征服の為に！来るべき、その向こうにある野望の為に！！」

人望ある者の決意は、士気を向上させる事が出来ると、彼女の祖父は言っていた。

「私の為にと、かの有名なジャンヌ・ダルクは言った。でも私は違う。敢えて言うならば、この国の民のために、そして野望の為に！」

ならば彼女は、彼らの士気を上げられるのか。
問われれば、答えは三日前に出ている。

「私達は今、立ち上がるのよ！高貴なる者の義務を振り翳し、バラバラになつた国々を一つに纏め上げる為に！」

不意に、花奈は腕を振り上げた。

それに呼応するかのように、皆も上げる。

握り拳を作り、高々と掲げられ、木々のようになる。

この光景が、人望のある証だ。

やがて下げられた拳は、次の言葉を生む。

「それでは皆、勝ちに行こう！」

歡喜が上がる。

またしても、何が来た。

その声を聞きながら、微笑を漏らした花奈は身体を翻す。

僕もそれに合わせて身体を翻し、歩き出した彼女について行く。

途中、彼女はこちらを向かず、声を掛けてきた。

「……ねえ、鏡華。勝てると思う？　なんて聞いてもいいかしら」

「駄目ですよ、その言葉は。禁句と言っても過言ではありません」

「そう、よね。一国の代表が、さっき言っただけの事を無駄にするような事、言っちゃ駄目よね」

……うん、なんだろう。

今の花奈を見て、意見にしようとするA4ノートが埋まりそうなので、敢えて一言で言うならば、らしくないなあ。

珍しく弱気だ。

まあ、まだ十八歳だから仕方無い、と言えば仕方無い。

でも、一国を背負う彼女にとっては、仕方無いなんて言葉は甘えになる。

「花奈は勝つと言いました。だから勝ちます。花奈について来た者は皆、有言実行の出来る人達ですから」

彼らは信頼出来るから、心配なんて何処にも無い。

だって、一年半も国を任せていて、何とも無かったんだから。

「そうね、その通りだわ。……良き者達ね」

「ええ、良き者達です」

本当に、良き者達だ。

だからこそ僕らは、その者達と共に向かうのだ。

世界に名を知らしめる為の一戦を行いに。

さて、国際的犯罪劇の始まりだ。

同日、十一時十分。

ついでに天気は晴れ。

雲がフロントガラスから見える光景の下方に少しあるけども、良い天気だ。

その空を、僕達が乗る航空艦が航行する。

もちろん、ステルス機能なんて便利な物は無い為、船体は丸見えである。

当たり前だよ、バーロー。

まあその分、日本の皆さんに戦慄を与える事に成功しているだろうけど。

一応、隣に居る操縦士に聞いてみましょうそうしましょう。

「クリミナルって、傍から見たらどんな感想が生まれるんでしょうかね？」

問いに、自動航行中というデジタル表示がハンドル奥の液晶に出ているのにも関わらず、しっかりとハンドルを握っている優衣は、こちらを向かずに返事をした。

緊張だな、うん。

「そうですねえ……。空飛ぶシャーペンでも見たって感じでしょう

か？」

「はは、優衣はご冗談がお上手ですね。もしや、自動航行中と表示されているのにハンドルを握っているそれも、ご冗談の一環ですか？」

「え？ あ、おわあ！ ……じよ、冗談でした！」

うむ、さり気無く注意出来た。はなまるだねっ。

ハンドルから慌てて手を放した彼女は、次にコンピュータの操作を始めた。

何かやっていないと落ち着かないのかな。

まあ、何とか初々しい光景だなあ。

どんな兵士でも、初陣はこんな感じだろうか。

とりあえず、前方の大窓を見やる。

うむ、現在地が全く持つて不詳。

「オペレーター、クリミナルの現在地は？」

『現在、埼玉県上空を航行中。もう間もなく目的地ですので、次第に降下、国会議事堂を目下に特定する事となります』

右斜め後ろから聞こえる女声は、良く聞こえる完璧な声だ。

オペレーターとして、必要不可欠な声である。

とまあ、賞賛は二行までにしておいて。

もうすぐだ。

それに備えて、僕は目の前にあるパネルを操作して、目的地周辺の地図を用意した。

もちろん、3Dである。

とは言っても、国会議事堂前は道路が一直線にある為、さほど問題はない。

そこに軍を敷き詰められたら困るけど。

思った刹那、不安は現実となったかもしれへん。

「艦長！ クリミナルの下部、周囲に複数の熱源を感知！ 自衛隊が展開しています！」

「準備万端のようね。宣戦布告をした甲斐があったわ。……鏡華、交渉をお願い」

「了解です。オペレーター、モニターをお偉いさんに繋げて下さい」

言ったのとほぼ同時に、それが来た。

フロントガラスの上部にある大型モニターに、忙しい光景を背景とした、丸々と肥えた男が映し出された。

自衛隊員が多数走り回り、その奥には大型トレーラーが目立って見える。

ちなみに彼が居る場所は、周辺に機器が置かれている作戦本部という所だろう。

「えと、どうもこんにちは。お初にお目にかかりますね。僕はノーブレス・オブリージユの国王、神無月 花奈の側近で本艦の副艦長、鏡華と申します。以後、お見知りおきを」

形だけの挨拶と言うものは、実に形だけである。

現にモニターに映る彼は、困惑している。

しょうがない、こちらから放し掛けてあげよう。僕はいつも、上から目線なのだ。

「貴方は確か、総理大臣の……吉田さん？」

「違う、上城だ！ かみしろ そんな事より、これは一体どういう事だ！？」

「どういう事だと言われましても、そのままの意味です。世界征服の第一歩として、この日本国を侵略しに参りました。ですが、唐突で一方的過ぎるのは不味いと思い、交渉の為にこうして連絡させていただきました」

『交渉だと！？ 特殊中立国である日本に侵攻した時点で、お前らは世界の犯罪者だ！』

おやおや、大分気が立っている様子。

画面に唾まで飛ばして、下品な姿を最大限に晒しているなあ、この首相は。

貴方の立場など、所詮は飾りだというのに。

日本は貴方が居なくても、特殊中立国の肩書きに守られているのだから。

でも人質にすれば、重要視される。

何とも中途半端な立場のう。

まあ、もちろん敢えて言わないけどね。

「交渉の余地無し、と。貴方がたはそう仰りたいのですね？」

武力の差は明確だと言うのに。

それでもなお、吼える事の出来る彼は役職に溺れているね。もし負けても、総理大臣だから生かされると。

『当然だ！ 我が日本は中立だからな！』

そう、国民を踏み台にして肥えた口が、吼える。

だったら、仕方無いね。

「わかりました。それでは予定通り、武力制圧を開始します。

左右舷電磁投射砲起動。照準合わせ、目標国会議事堂！」

『了解！ 電磁投射砲、三十度回頭、照準に目ひよ 右舷電磁投

射砲、被弾！ 先制攻撃、先制攻撃です！ 右舷電磁投射砲、回避

の為に緊急収納します！』

おや、思ったより早い攻撃だなあ。

なんて、暢気な感想を浮かべている暇は無いんだけどね。

警報は続く。

『緊急！ 後方、及び左右から大多数の熱源！ 戦闘機の編隊だと思われます！ また、巨大輸送機の接近も確認！』

「アサルトですね。やっぱり、情報通り隠し持っていましたか。でも、この緊急事態には使用も止むを得ない、と。 対空砲門、全システム起動。ひとつ残らず撃墜して下さい！ 巨大輸送機を最優先に願います！」

言いながら、いつの間にか通信が切れているモニターを見て、微笑。

どうやらあちらも、初めからやる気だったようだ。

「優衣、本艦の現状図の3D表示をお願いします」

「りよ、了解しました！ 表示します！」

返事をする優衣は、僕の目前にあるパネルを代わりに操作した。すると前方にある立体映像装置に、シャープペン もとい、クリミナルの立体図が浮かび上がり、時々船体の一部分を赤くしていた。

ちなみに時々赤くなる部分は、被弾箇所らしい。

おおう、先程から下部が赤連発のお祭り状態だ。

「対地砲撃はやっていないのですか！？ 下部の被害が後を絶たないようですよ！」

『対地砲撃は先程から決行中です！ しかし、自衛隊は数で押して来ている為に、弾幕が薄れず悪戦苦闘中！ また、対空砲も確認されておりますが、ジャマーにより二・三機しか補足出来ず、です！』

「さすがは嘔吐き大国……他国に隠して大量の武力導入ですか」

おっと、つい心の声が出てしまった。

ともあれ、思った以上に対抗を続けるねえ、日本。

こっちは諸事情で、国会議事堂から大分離れた空域から移動は出来ない。

そして、国会議事堂への砲撃も、これまた諸事情で不可能。

ちなみに最初の電磁投射砲は、脅しだ。当てるつもりなど全く無かった、と言いつけさせて欲しい。

つまりは、一点に留まって自衛隊の鎮圧しか、僕達にはやる事が無い。

だったら、そろそろ出るかな。

「本艦を守り切る為、三連式砲門も前門起動しておいて下さい。ついでに、再度電磁投射砲の準備を。僕はこれより、アサルトにて地上戦を開始します。地上部隊に、降下の準備をお願いして下さい。電磁投射砲の発射と同時に降下を開始しますので」

『了解しました。……鏡華様、ご武運をお祈りします』

「ありがとうございます。それでは花奈、次会う時は良い結果の下で」

『ええ、そうなる事を祈ってるわ。……力を見せ付けてきなさい』

僕は無言で手を一振りするのを返事として、エレベーターへと向かった。

もっとも、既に僕の手など見えていなかっただろうけどね。

……つてか、今更ながらに思うけど、揺れが酷い。

いくらAD搭載でも、それは船体と地上との間で適応するのであって、艦内に適応されないのだ。

歩くのがやつとである。

先程までこの揺れを感じなかった事を思うと、どうやら各席には

耐震設計がばっちり成されているようだ。
とりあえず、やっとの思いで到着したエレベーターに乗り込み、
艦橋を後にした。

「よう、やつと来たか」
「ええ、やつと来ました」

へつと笑う理責は、火気厳禁であるここ格納庫にて煙草を蒸かしながら、さも偉そうな表情でパイプ椅子に座っていた。

踏ん反り返っていた、というのは + 扱いとしよう。面倒だし。
ともあれ、そんな状態のおっさんは、僕が来るなり煙草を投げ捨てて（二度言うが、火気厳禁である）立ち上がった。

ってか、このおっさんは本当、何者だ？

この、未だに揺れている艦内で、何事も無くパイプ椅子に座っているとは。

僕でさえ、手摺を掴んでやつと耐えているというのに。
マッシーンで出来てるのだろうか。OG-3型なのか。

ちなみに、僕らが立っている場所は可動式の渡り橋で、僕のアサルトのコックピットへと伸びている。

それと少し遅れたけど、周囲を見渡せば艦内と思える程広い。

クリミナルの内部、数ブロック分を使用しているらしいから当たり前か。

奥を見れば、平行降下用のブースターが付いた？コンテナ？が敷き詰められている。

どうやら地上部隊は準備万端のようだ。

「皆さんせつかちなんです。もう殻に籠るなんて」

「お前さんが暢気なだけだ。もう少し遅く来ていたら、先に降下しておったわ」

「あれ？ そんな事をしたら、電磁投射砲の餌食ですよ？ まさか、三十路にもなつて命令ミスで職を失うつもりだったんですか！？」

「何でレールガンの発射をお前さんに合わせにやなんのだ。発射と同時に降下開始なら、餌食にはならん」

「あ、珍しくまともですね。いつもなら怒り出して発狂し」

『ああ！ いつまでおっさんと話してるんだよ鏡華さん！ こちとらいつもと違う糞暑い操縦席ですつと待機してるんだ、早く始めさせてくれ！』

おおう、起こられた。

怒りを露にして、手摺にセットされているモニター越しに声を荒げているのは地上部隊の総隊長さん……だったかな。

名前は多分、ジョニー・イマイ。

ハーフか。

怒り易い理由は、幼少期にハーフだと苛められたからかな。

だからといって、独立国である我が国に亡命されてもなあ。

ちなみに今は、アメリカの血が影響して、Mr・ユーモアマンとして大人気である。

そんな彼を真つ先に受け入れたのが、現在の妻、ジェニファー・イトウだ。

なんだ、貴女もハーフか。

良い夫婦だね、まる。

以上（異常）、脳内設定の内心音読でした。

実際の所、どんな人物なのかは全く持つて不明である。

ともあれ、そんな彼が怒ってるのだ。僕も早めに取り込もう。

「それでは煙草臭い三十路じい、出来ればもう顔を見合わせる事は

無いよう祈ります」

「せいぜい無様に被弾しやがれ、小便臭い青二才。次に顔合わせやら、問答無用で殴り合いだ。……ジョッキ同士をな」

上手い事言ったつもりなのだろうか。臭い台詞だ。

そんな事を思っているとは知らぬ理貴は、片手を上げて去って行き、対する僕はアサルトの、人間で言う肩甲骨と肩甲骨の間辺りにある搭乗口へと向かった。

相変わらず真つ暗な操縦席で、僕は目を瞑る。

音は無い。光も無い。匂いも臭いも無い。何も無い。だが不意に光が来た。

それは、意識が電腦へと向いて仮想空間に入った瞬間の出来事だ。視界がクリアになり、機体の各情報がクリアウィンドウになって周囲に展開される。

今更ながらに簡単な例えを上げると、パソコンの画面である。インターネットをしている時に表示されるウィンドウが、半透明状態で周りに浮かび上がっている感じ。

シュミレーションの時よりも、少し見やすい。

「お気に召して頂けたようで、幸いです」

不意に、声が来た。

しかも僕の声。

はつきりいって、僕の意味以外で聞こえる自分の声ってもんは、良い感じがしないな。気持ち悪い。

「すみませんが、声を変えてくれませんか？　気分が悪くなるので」
「それはそれは、申し訳ありませんでした。それでは変更　させ
て頂きます。どうでしょうか？」

今度は女性の声。

良かった、僕の声を変換した声じゃなくて。

もしそうだったら、問答無用で自爆ボタンを押してたね。無いけど。

「ありがとう。さてさて、それでは質問タイムといきましょうか。

……貴女は誰ですか？」

「ド直球ですね。ヒットが打ち易いです。……私は貴方。いえ、貴
方の人格を参考に成長したAIです」

「何で会話のキャッチボールで、いきなりバッドを持ち出すんです
か。まあ一応、ノーバンキャッチでアウトにさせて頂きます」

「残念、実はそれテニスボールです。キャッチャーが軽く投げたの
をバッターが打ったのです。ちなみに私はキャッチャーですよ？
キャッチボールは継続中で　」

「いつの間に僕の人格を参考にしたんですか。　あ、すみません。
テニスボールを頂いたので、貴女が答え終わる前にもう一度投げさ
せて頂きました。テニスボールもボールですから、キャッチボール
はもちろん可能ですよね？　あ、ボールが二つ手元にありますね。
必然的に回答は二回、意願います」

「そうになると会話の回数が割に合わない気が……。まあいいです。
テニスボールは捨てて、一回に纏めます。　先日のシュミレーシ
ョンの際、貴方の電脳を覗かせて頂きました。そして記憶も見、貴
方がどういう人かを確認し、私の人格形成の参考にしたのです」

あ、プライバシーの侵害って奴だ。

それはさておき、つまりはもう一人の僕という訳か。
戦闘時における、相棒って奴だね、うん。

「ちなみに、私の人格の存在を理責さんは知りません。知れませんが、私を知る者は貴方だけ。次いで、貴方の全てを知る者は私だけとなります」

「トップシークレットクラスの情報を知る者同士、ですか」

さすがは僕の人格を参考にしただけあるな。
考えが嫌らしいのなんのって。

「というわけで、えと……バトルアシスタントシステムだと思って下さい」

「BASですか？ ……バス、よろしくです」

「失礼ですがマスター、女性の名にバスは相応しく無いと思います
が？」

「女性らしさを求めますか……。僕のネーミングセンスは最悪ですよ？」

注文の多い女性だ。

本当、上手く僕の性格を参考にしていらっしゃる。
だからこそ、憎めないなあ。

「ではよろしく キャナル」

「ヤー、マイマスター」

「ではさっそく、オペレーターとの回線を繋いで下さい」

言っと、ヤーという言葉と共に、左上にウィンドウが展開し、オペレーターの顔が映った。

……あっちには、僕がどんな風に映っているんだろう。

ちなみにヤーとは、ドイツ語の？Ja？の発音であり、意味は？はい？などの肯定・了解・承知だ。

？いいえ？などの否定は？Nein？ナインね。

って、こいつドイツ製？

「オペレーター、準備完了です。降下開始のカウントをお願いします」

「了解しました。対地砲門を降下ハッチ下部に集中。次いでハッチ解放後、カウント5で電磁投射砲の発射と共に降下開始となります」

そう言っている間にも、格納庫の一部の床、降下ハッチが開放を始め、アサルトを固定しているカタパルトによって、機体が横に垂直となる形にされる。

正面を見れば、真下を見ている感じへと。

それでも違和感が、身体が下に落ちるような感覚が無いのは、A Dの凄さか。

おっと、降下ハッチが全開した。

「カウント開始 5、4、3、2……降下！」

刹那、電磁投射砲の轟音と共にカタパルトが外れ、機体が落ちる。降下開始だ。

大地は、まだ遠い。

「それでは、降下中に武装の説明を簡単に説明させていただきます。ちなみに操作は簡単、マスターは現在アサルトの神経回路と一心同体ですので、身体を動かす感覚だけで結構です。小型ブースターもイメージするだけで起動します」

シュミレーションの際に、理責が似たような事を言ってたな。

本当、便利になったもんだ。

「右手には手と共に格納可能な短機関銃サブマシンガンと、現在格納状態にある鉤爪クを装着。展開は手首を軸に半円を描きながら起き上がり、手の甲で固定される仕組みです。尚、オリハルコン製の刀身は高速振動を起こしており、あらゆる物質の高速切断が可能となっております」

僕よりも少し先に降下した？コンテナ？は、ブースターを上部に向けており、高速降下をしているようだ。

まあ、早く降りないとただの的だからね。

「左手には突撃銃アサルトライフル。ちなみに左右のリロードにつきましては、簡易リロードを可能にする為、腰にマガジンが装着されています」

？コンテナ？は無事に降下を完了したようだ。

ちなみに僕は、ブースターを下部に噴出させている為に落下を遅らせている。

戦場を見渡す為に。

「両肩には今回、弾薬庫をセットさせて頂きました。よって、弾薬の不足は当分ありませんのでご安心を。以上、武装の説明を終了させて頂きます。それでは、AD機関による高速機動、超回避、空中乱舞をお楽しみ下さい。グーテ ライゼ」

？Gute Reise？良いご旅行を、か。

説明終了と共に、警告音が来た。

その警告音は視界の一部をズームさせ、危険を目視させる。

戦車六台分の砲塔が、こちらを狙っていた。

大地に激震が起こって暫くすると、それは来ていた。
人型の機体が降下して来ていたのだ。

地上は既に、敵の部隊によって埋まりそうなものにも関わらず、まだ援軍を投下して来ていた。

もちろんの事、一斉攻撃が開始される。

しかしその機体は、空中でのあり得ない回避運動を見せつけ、兵士に戦慄を与える。

そしていよいよ、それは大地に降り立った。

轟音を立て、大地を揺らし、ブースターによる風圧を周囲に与える。

恐怖は、遅れて到達する。

「……わざわざ三人称風のナレーション、お疲れ様です」

「ニヒツ、ツー ダンケン。またのご利用をお待ちしております」

本当、人間っぽいなあ。

それに、名前を与えてからだろうか、ドイツ語が目立つ。

はいはい、訳ね訳。

? N i c h t s z u d a n k e n ? お礼には、及びませんっとな。

まあ、そんなこたあどうでも良いんでさ。

さてさて、とうとう降り立った。

戦場……かなり喧しいな。

銃弾などが絶え間無く飛び交っている。

などと考えている僕自身も、現在ヒット＆アウェイ（比率は3：7）に専念中だ。

遠くには先に降下してすでに交戦中の地上部隊が見える。

戦車と改造を加えてある偵察用小型アサルトが、戦場を走り回っている。

でも、自衛隊の戦力は殆ど僕に向いているんだよねあ。

警報音鳴りっぱなしで、迷惑極まりない現状である。

「マスター、前に出てみては如何ですか？　せつかくの高機動が台無しです」

「無理だぎゃ！　な現状ですよ……なんて弱音、吐いてる場合じゃないんですね」

当然です、とキャナルちゃん。

当然ですか、と僕くん。

あれ？　一人称に君付けすると、まるで他人だな。

どーでも良いさー。

「それじゃ、前に出てみます　　よっ！？」

素早く前に出る事をイメージした瞬間、後部の全ブースターが起動したのか、視界の流れ方が変わった。

高速つて奴かな。

ADが無かったら、Gが凄いだろっなあ。

などと考えている間に、敵戦車が目前に迫った。

故に、構えるは左の突撃銃。

銃弾はアサルト用である為に、装甲を穿つには十分な威力を発揮してくれる。

だからそうした。

引き金を引いた瞬間に銃弾は放たれ、三つの穴を戦車の上部に開ける。

次いで、爆発する前に右足で戦車を踏み、跳躍。

前方に群がる装甲車に短機関銃の銃弾をばら撒きながら、左腕・脚のブースターを起動して右へ。

狙うは、視界に入った対空砲。

「キャナル、周囲を索敵して、他の対空砲を探して下さい。同時に、位置を視認可能に！」

「ヤー、マイマスター。……対空砲、他四台確認。次いで、パトリオットミサイルも確認しました。今時こんな物を使うとは」

「焦っていたのでしょうか。っと、それでは地上部隊に電文お願いします。各個、対空砲を破壊、と」

「ヤー、マイマスター」

うん、これで大丈夫。

そう安心しながら、右手の鉤爪を展開させ、対空砲を切断する。地上は順調だ。

だが、すぐにその順調をぶち壊す奴が来るだろう。

思い、周囲を見渡せば、案の定奴らが来ていた。

アサルトだ。

「……四脚型の重装備が四に、ホバークラフトの高機動型が三かな、肉眼で捉えられるのは」

「別エリアでもアサルトの目撃報告。地上部隊が各自交戦中です。

しかし、各エリアに一機ずつしか確認出来ないところを見ると、やはり大量導入は不可能だったようですね」

「まず、量産自体無理な高コスト兵器だからね。まあ、巨大輸送機を早めに落としたのも理由に入るだろうけど」

とりえずは、戦車では不利なこの現状では、対応出来るのは僕しか居ない、と。

そう思った矢先に、遠くで連続した爆発が起きた。

……不味いなあーあ。

内心でそう呟きながら、四脚アサルトが装備しているミニガン（別名は電動式ガトリングガンだったかな）の掃射を回避しつつ、高機動アサルトに接近を開始する。

対してホバークラフトで移動するそれは、僕の接近に合わせて距離を取るうとする。

けど、遅いよっと。

出力を上げたブースターは、容易に接近を許す。

まずはホバークラフトを突撃銃で破壊。

次いで、速度を失った本体の中央に鉤爪を刺し込む。

そして、再利用。資源は大切に使わないとね。

内心で呟きながら、鉤爪を刺し込んだ資源を、後方に投擲した。すると、それはミニガンを掃射していた四脚アサルトの一機に直撃し、姿勢を崩させる。

また、その倒れた仲間を気にしてか、周囲の四脚アサルトの頭部がその方へと向き、僕を視界から外す。

「駄目駄目ですね。訓練不足でしょうか」

「ですよねえ。交戦中に余所見だなんて、死亡フラグ直結ですよ」

言って、僕は両手の銃を構える。

命中率は先程、さり気無く試した。良い結果だった。

だとしたら、静止した状態で狙えばどうなるか。

百発百中だね、うん。

だから狙う、四脚部分を。

そして結果は、全四脚アサルトが姿勢を崩し、その場で倒れた。大成功。

喜ぶのも束の間、四脚アサルトは倒れながらもミニガンの掃射を開始する。

命中率は皆無だが。

「一気に行きましようかつと」

言葉と同時に、僕は行く。

鉤爪を構えつつ、回り込むようにして、無様な姿を晒す四脚アサルトへと。

そして、真つ二つにした。してやった。

操縦士はもちろん、死んじやっただろうな。

あ、今更ながら……人殺し、だねえ。

どうでも良いけど。

戦況は、優勢と言えば優勢だ。

こちらの被害もかなりのものだけど。

そんな戦場で、僕は休憩という形で停止していた。

「……どうしたのですか？　かなりテンションが下がっているようですが」

「いやいや、僕は元からテンションを上げてても下げてもいませんよ。ただ、ね……」

ただ、ただ。

「懐かしいって、思っただけです。殺意と復讐と憤怒が入り混じ

って、結果に死を生む場所が、です」

それは戦場ではなかったけど。
十分に戦場と呼んで良い場所です。
最初に死んだのは赤の他人だった。

次に死んだのは友達だった。
どんどん死んでいった。

それらが続いて終わった後の移動先は、
またしても死の連鎖場で。
けれども僕は、殺し続けて。

「……ごめんなさい……と……」

「？ どうしたのですか？」

「いいえ、何でもありませんよ。……それでは、再開しましょうか。
そろそろ終いです」

貴方達の屍を越えて、僕はまた屍を増やしている。

謝って許される行為では無いけれど、僕の心は少しだけ、ほんの
少しだけ、救われる気がするから。

だから、ごめんなさい。

生き続けていて、ごめんなさい。

確認出来るアサルトが、あと一機。

それは目の前に居て、意外と手強い。
四脚アサルトなのに動きが良いのだ。

いや、自分の装備を把握しきっている、かなりの熟練者だからだろうか。

と、その時だ。

突然、声が響く。

前方に居る四客アサルトから、だ。

『アンノウンアサルトのパイロットに一つ聞きたい！ お前達は何故、これ程の被害を生んでまで侵略しようとするんだ！？』

「……性別、男性。声帯照合……二十歳前後です」

「あ、二十歳丁度なら同じ年になりますね」

二十歳前後でアサルトを乗りこなす、かあ。

流石の流石という、訳の分からん言葉が脳内で生まれたが、気にしないでここう。

とりあえず、返答はするべき、なのかな。

でも、彼は正義の塊かもしれないしなあ。

ま、いつか。

「何故、と問いますか、それは後程、国王である神無月 花奈が演説されます。その時にお答えをお聞き下さい」

『ふざけるな！ 特殊中立国の、平和だった日本を武力で滅茶苦茶にされたのに、後から聞けと言う言葉にはいそひそひ承出来る訳が無いだろう！』

おお、怖い怖い。

最近の若者は、キレるのが早いなあ。

ま、若者に限った事じゃないんだけどね。

だいたい、大人もキレやすい人はキレやすいのに、何でわ お

つと。

閑話休題。

そんな事よりも、だ。

平和ねえ。

「そこまで言うのでしたら、こちらも何故、と問わせて頂きます。

何故、平和を掲げる特殊中立国は、アサルトという武力をお持ちで？ 確か、特殊中立国の条件は、過剰な武力を持たない、でしたよね？」

『な！ そ、それは 』

「まあ、貴方に問うても仕方の無い事でしたね。……ところで、僕はその条約違反も纏めて解決して、あわよくば戦争を終わらす為に、世界平和の為に侵略を行っているのですが……どうですか？ 貴方もお仲間に入りませんか？」

『断る！ 俺は、お前達を許せないんでね！！』

腹の底からの叫び。

それは拡声器によって、周囲に響き渡った。

心からの拒絶、だね。

だったら、仕方無いよね。

壊しちゃっても。

決意と同時、後部のブースターを全開にして、僕は行く。

真正面から一気に。

すると、相手は両手に装備されたミニガンを掃射して、僕の接近を防ごうとする。

僕はそれを、右側のブースターを使って左へ跳び、回避する。

刹那、警報。

「マスター、ミサイルが先読みで回避先に飛来」

視認したよっ！

回避、出来るかな。

起動するのは、脚部裏のブースターと胸元のブースター。

出力は全開。

すると、まるでバナナの皮で転んだかのように、機体が回る。

綺麗に、美しく……は冗談だけど。

そして、ミサイルは回避出来た。

だがしかし、まだミサイルは来る。

僕はそれを、回転し終えて元の姿勢に戻った瞬間に、両手の銃で撃ち落とす。

瞬間、広がる爆発と爆煙。

発煙弾要らずだねっなどと内心でウインクしながら、好機と見て一気に爆煙へと突っ込む。

さり気無く右側のブースターで左に行きながら。

そして抜ければ、相手は目前だ。

……青年Aで良いかな。

すると、相手改め青年Aは、僕に両手のミニガンを構える。

でも遅い。

瞬間で十分な時間の間に、構えた鉤爪を振り、ミニガンを真っ二つにする。

そのまま、鉤爪を振った右手の勢いを利用して、左回転。

あ、もちろんブースターは使っているよ。

ともあれ、回転した理由は、たった今青年Aにぶちかました回し蹴りを行う為だ。

それにより、四脚アサルトの前脚二本は破損し、姿勢が崩れる。でも、まだだ。

ついでという便利な言葉を利用して、鉤爪を使い両肩のミサイルポットを破壊し、機体の中央、操縦席部分に鉤爪を構える。

「これでチエツチユツ！……」

何で噛んだよ僕。

気を取り直して、テイク2。

「これでチェックメ」

『鏡華さん、全自衛隊鎮圧完了しやしたぜ！ 繰り返す、全自衛隊鎮圧完了！』

ジョニー（仮）の通信に邪魔された。

「何ですか貴方。僕の邪魔をするなんて、良い度胸してるじゃないですか」

『え！？ な、なんで怒ってんの！？ 俺、何かしました！？』

「……いえ、もう良いです。クリミナル下部にて待機と伝えて下さい。それと、クリミナルの被害は？」

問うと、暫く間が生まれた。

ちなみに、この間にテイク3を始めるつもりは無い。

『報告きました！ えと、被害はかなりの物で、各ブロックが大破。火災も多発している為、戦闘続行は危ういとの事！』

……うむ、危ないな。

自衛隊を鎮圧出来た時は、ギリギリセーフだった訳か。
危ない危ない。

「とにかく、お疲れ様でした。後は、花奈が演説を終えるだ」

刹那、それは爆音と共に起きた。
音のする方を見れば、クリミナルが真っ二つになり、爆炎と爆風

を生んでいた。

そして、浮遊が出来なくなったクリミナルは、地上に落下する。轟音や地響きを立て、下部に居た見方の地上部隊を巻き込んで、次いでほぼ同時、周囲に何かが多数落下して来た。

見れば、それはアサルトだ。

型は超重装甲車。

アメリカ軍奇襲降下部隊のオリジナル機体だ。

……完全に囲まれたなあ。

「えと、キヤナル。上城総理大臣に通信回線を開いて下さい。映像付きでね」

「ヤー、マイマスター。……映像出ます」

言葉と共に、新たなウィンドウが展開して上城の顔が映し出された。

その表情は満面の笑み。

「良く出来ました、です上城総理大臣。嬉しそうですね、自衛隊は全滅したというのに」

『それでもだ。お前達の旗艦を落とし、地上部隊を壊滅状態に追いやれたのは嬉しい事だよ。これで、お前達の侵略劇は幕引きだ!』

「確かにそうですね。援軍が来ちゃった訳ですし」

空を見る。青空だ。

そして、その向こうには宇宙が……っと、行き過ぎた。

青空の一箇所に、光が見えた。

うん、問題無し。

「あ、一つ貴方の勘違いを正しますよ？ 援軍は貴方側では無い、僕ら側に来たんです」

『んなに？ 馬鹿を言う つ！？』

上城の言葉が止まった。

つという事は見えたかな。

さて、僕も見ようかな。

もう一度、空を。

そこにはクリミナルと同じ型の航空艦が五隻、降下をして来ていた。

「茶番だったんですよ、寸劇と言う名のね。このアメリカ降下部隊は、僕らの艦から降下して来たものなんです。あ、もちろん僕らの艦を一隻撃沈されたのもわざとです。一瞬だけでも、勝利に油断した貴方の面白い顔が見てみたかったものでつい」

おっと、言ってる間に事が始まった。

上城の後方、大型トレーラーの扉が開いた瞬間、銃を持った歩兵数十人と、花奈が出て来た。

実は僕達、仕掛け人なのだ。

世界が丸見えているらしい番組のドッキリ風に、各自僕の台詞を脳内再生して頂きたい。

ちなみにターゲットはもちろん、日本の国民とお偉いさん達だ。

ちなみにちなみに、ここで起きた事は全て、上空の航空艦が日本中の地デジ電波をジャックして、日本国民に駄々漏れである。

ついでに世界中の回線もジャック済みだ。

これで日本は、自国の違法な武力を世界中の人々に見せる事が出来たよつ。

やったねっ！

つと、そんな事を考えている間に、花奈が上城との会話を終えて、私兵にカメラを用意させた。

「キャナルキャナル！ 地デジを受信して、一般放送を開いて！」

「ヤー、マイマスター。……素に戻ってますよ？」

「良いんだよ良いんだよ。愛しの花奈が、世界同時生放送をするんだからねっ！」

うわあ、テンション上がってきたあ！

などと脳内がお祭り騒ぎとなっている内に、花奈が一般回線に映った。

表情には凜って文字が似合うね、うん。

『日本国民の皆！ 願わくば、私の言葉を最後まで聞いて欲しいの』

いつも通りの、（僕の）心に響く声が聞こえる。

『私達は、独立国ノーブレス・オブリージュ。今日にこの日本を制圧し、そこから世界征服をする者達よ。でもそれは、戦争を終わらせる為の一時的な支配。そして、私達の野望を叶える為の下準備なの。それを、無理に理解して欲しいとは言わないわ。でも！』

でも、という言葉と同時に、画面の右下に映像が流れた。

小さな枠で映し出されているそれは、先程の戦闘だ。

あ、一瞬僕が映った。

『特殊中立国と名乗って、皆に平和を与えと言ったこの国は、何を持っていたか分かる！？ 中立国の条約違反である過剰な兵器、アサルトを導入していたのよ！？ これは、発覚すれば特殊中立国

から除外されて、一気に国民全員を危険に晒す行為なの！　これを、貴方達は許せると言える！？』

ちなみに、今演説を行っている花奈が、何故あの場所に居るのか、という疑問があるだろう。

簡単だ。クリミナルには乗っていなかったのだ。

だから、上城は僕が副艦長と名乗ったのにも関わらず会話をした。艦長の姿が無いんだもの、仕方無い事だよ。

オペレーター達も同様。

だって、声しか聞こえてなかったもんね。

しかも通信機越しの声。

唯一乗っていたのは、僕と優衣と理貴だけだったのだ。

もちろん優衣と理貴は、僕が降下した後にはちゃんと脱出している。

『しかし、私は違うわ！　圧倒的な武力がある、技術がある！　私達はこの力を、制圧した国全ての完璧な防衛に回す事を誓うわ！　軍は、民を守る為にあるのだから！！』

そして、この戦場に降り立ったのも、僕一人だけ。

戦車や偵察アサルトは全部、遠隔操作。

ジョニー（仮）やその他諸々の地上部隊は、その遠隔操作を今上空に居る航空艦内で行っていた、と。

まあ、つまりはこちら側に被害は無かったという事だねっ。

完全勝利。

『そして、喜ばしい事にアメリカ合衆国がこの考えに賛同してくれたわ！　故に私は、進んで交渉を持ちかけて来る国には、完全防衛を保障する。けれども、制圧に反対する国には、武力で侵略させて貰うわよ！』

んで、アメリカがいつの間に味方になっていたかっていうと……
って、まあ分かるか。

交渉を行ったのはスパイさん。
アメリカに行っていたいいいてのは、味方に付ける為だったんだよ
っと。

正直、アメリカが味方になったのは嬉しい。
世界地図で言えば、右側から攻められる心配は無いからねえ。

『ともあれ、ここ日本は今この瞬間から、ノーブレス・オブリージ
ユの支配下に置かれ、絶対的な安全をここに宣言する！！』

高々と上げられた花奈の手。

その姿はまるで、某独裁者のようだけど。

けれども、彼女は国民第一主義者であって。

だからこそ、この世界征服は成功させるべきものなのだ。

……さて、青年Aは他に任せて、と。

上空で待つ航空艦に戻りましょー。

こうして僕達は、国際的犯罪を一つ完遂させて、晴れて前科持ち
となりましたとさ。

第五話：魔王と死神

暗闇の中で、唐突に光が点滅した。

それは、僕の携帯電話の光であり、着信を報せる虹色の光だ。
現在、僕は寝室に居る。

花奈はまだ帰って来ていないから、一人だ。

緊急の会議が、かなり長いものになっているらしい。
だから、待っている。

大きな鏡が立てかけられている、寝室と繋がった小部屋でソファに座りながら。

明かりも付けずにね。

……おっとそうだ、着信着信っと。

折りたたみ式の携帯をカチャリと開き、ディスプレイの光に目を細めながらも、通話ボタンをポチっとな。

『やっと出たか。お前にしては珍しく遅かったな』

『こんばんは、社長さん。久方ぶりですね』

『阿呆、昨日も電話しただろうが。……まあ良い。花奈は居るのか？』

『居ませんよ。花奈は現在、会議中です』

『なら良かった。おっとそうだ。とりあえず、日本制圧お疲れ様な。圧倒的だったじゃないか』

『ありがとうございます。ですが、貴方の技術支援が無ければ、まず決起自体起こせませんでした。感謝しますよ、世界規模の超有名企業FMP社の社長さん』

『あゝ……出来れば、俺を特定可能な単語は出さないようにして欲しいんだがな。妻が怒る』

「真顔で言わせて貰います、嘘付けっ。天然要素全開なあの奥さんが、怒るなんて想像出来ません。嘘吐き！ 妹さんに言いつけます」
『何故そうなるのか、意味が分かんねえよ。それにお前、妹に会った事無いだろうに』

「ありますよ？ 手料理をご馳走にもなりました。本当、天才通り越して秀才ですね。花奈担当のシェフにしたい位ですよ、いや本当」
『お前いつの間に……』

「あ、すみません。そろそろ閑話休題としませんか？」

『……しょうがない、分かったよ。それじゃ、本題に入るか。お前、神無月翁に初めて会ったのは、数年前にアメリカが行った、テロリスト虐殺作戦、死のクリスマスの前日だったよな』

「ああ、あれですか。そうですね。戦場に放り出された僕達少年兵を、神無月翁が保護して回っていて、僕と出会ったんです」

『ああ、そこだ。つい最近になって、やっとその少年兵についての情報が手に入った。何でも、アメリカが極秘に収集した素質ある孤児を訓練させて、死のクリスマス前日、イヴの日の夜にテロリストの砦に降下させ、殲滅させたんだってな』

「よく、その情報が手に入りましたね。神無月翁が保護した少年兵の内、生きて帰って来たのは僕だけだというのに」

『いやまあ、会ったからな。あの日の、お前以外の生き残りに』

「……嘘、ですよね？ だって僕はあの日、神無月翁に言われたんですよ？ 君達で全員だ、他は全滅したって」

『生きてたんだよ。つというか、保護されてたんだ。神無月翁よりも先に来ていた奴にな。で、そいつらは現在傭兵をやっていた、とまあ、これが本題の前置きな。俺が聞きたいのは、この傭兵達が今何処に居るか、なんだ。お前にとっては問題な存在だから、さり気無く情報が入ってるかなと思って聞いたんだが……どうだ？』

「僕にとって問題、ですか。何で皆そう言っんですかね。確かに少

年兵だったあの頃の事は思い出したくも……あ、ああ、ああ……。そうか、そうだった、そうでした。スパイさんが、アメリカで見たって言うてました。大統領のボディガードをやってたとか。……そういう意味だったんですか……」

『おお！ そうか、アメリカか。だったら問題は、無いな』

「あ、解決ですか。結局、神無月翁と何の関係が？」

『いや、神無月翁の事は別件で、死亡理由を急に知りたくなってね。お前が言う、死神だからなんて理由は、どうも納得出来ない。だから、だよ』

「そういう……事でしたか……。てつきり、移民計画に関係してるかと」

『おいおい、そういうトップシークレットな情報も駄目だって。盗聴の可能性を考えろよ』

「宇宙移民計画。貴方がたFMP社全面協力の下、地球上に住まう全人類を宇宙へと移民させる計画。それは同時に地球再生計画の開始を意味している、でしたよね」

『人の話を聞け！ まだこれは、俺とお前と花奈しか知らない計画だろうが！ 容易に口に出すな……！』

「あゝあゝ、分かりました分かりました。分かりましたから黙って下さい、五月蠅いです」

『それはお前がわる……あゝ、もう良い。まあ、本題は済んだ。後は、世間話といこうじゃないか』

「嫌ですよ面倒臭い。何で貴方と世間話なんて」

『硬い事言つなよ！ 今日、娘が小学校で初めての運動会だったんだよ！ もうめちゃくちゃ可愛くてなんかもう、うわあゝ！ つてな感じでな。って、その運動会をお前らの侵略に邪魔されたんだよ、どうしてくれんだ！』

「……父親は娘が生まれると性格が変わるって言いますが、その通りですね。初めて貴方に会ったあの頃の第一印象は、冷静でカッコいい学生さんだったというのに」

『そうだったのか？ まあ、お前は初め、俺に敵意剥き出しだったからな。まさか、そんなお前とこうして普通に電話してるなんてな』
「花奈を救ってくれた恩人ですからね。その感謝の意を持って、貴方の計画に手を貸しているようなものですから」

『嬉しい事言ってくれるねえ。まあ、確かに おっと、来客だ。それじゃ、これからも色々よろしくな』

「はい、もちろんです」

通話が切れた。

故に今、耳に聞こえるのは、ツーツーという音だけだ。

……胸が、まだ軋む。

話の最中に、神無月翁の死という言葉が出て来た辺りから、胸が軋み始めていた。

携帯を持っていない右手で、胸に指を立てて必死に堪えていたが、耐え切れない。

……僕は、死神だ。

少年兵として訓練を受けていた頃、子供達が死ぬのはしょっちゅうだった。

だから、与えられた名前はアルファベット一文字を頭に置いた五桁の数字。

けれどもそんな中で、僕に近付いて来る者は、本名を教えてくる。初めは嬉しかった。

知人なんて、一人も居ない状況で友達が出来たのだから当然だ。

名前は……少年A？

でも、少年Aは目の前で死んだ。悲しかった。

次は……少女Aだった。

でも死んだ。

どんだん、名前を知って親しくなった者は死んでいった。もちろん、疑問だった。

けれど、名乗らなかった少年……あ、もうアルファベットは良いや。

とりあえず、その少年は死ななかった。

その時、確信した。

僕が名前を知った者は、死ぬんだと。

思い込みかもしれないけど。

それでも、怖かった。

死のクリスマスの時も、そうだった。

僕は神無月翁に保護された。

案内された輸送ヘリには、既に保護されていた少年兵達がいて、ここに居る者以外全滅したと言われ、僕らを乗せたヘリは飛び立った。

神無月翁は優しかった。

僕の恩人でもあり、僕に？鏡華？という名前を与えてくれた名付け人でもあった。

神無月翁は面白い人だった。

嬉しそうに、孫の面白い話を聞かせてくれたり、笑い話をしてくれたり。

けれど、名乗った。名乗ってしまった。

それから少し経ち、ヘリは墜落した。

落ちた。墜ちた。墜ちた。

ああ、軋みが強くなる。

身体が前のめりになる。

痛いイタイ居たい遺体いたい異体*itai*……。

脳裏に浮かぶ、息が絶え絶えな神無月翁。

僕のせいなのに、僕のせいなのに。

あの人は、笑っていた。

大丈夫だ、と。

唯一、生きていた僕に、死にそうな神無月翁は言葉を放つ。
僕のせいなのに、僕のせいなのに。

頼みがある、と。私の代わりに孫の傍に居てやってくれ、と。

死神の僕に頼んだ。

僕の、せいなのに……。

軋む。

吐き気がする。

胃液が、込み上がる準備を始めた感じがした。

頭痛頭痛頭痛。

名前なんて知りたくなかった。

名前なんて……。

人の名前を覚えられないのはそのせい。

一日経つと、忘れてしまう。

花奈の名前でさえも、最近になってやっと少しずつ定着してきたけども、完璧じゃない。

だから彼女は、毎朝自分の名を名乗る。

僕に自分が誰なのかを教える為に。

彼女は優しいから。

けれども他の人の名前は上手く定着しない。

まるで呪い。

死者は僕を恨んで、怨んでいるんだ。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

死なくて、死ねなくてごめんなさい……。

刹那、室内にガチャリという、入口の開く音が響いた。

この部屋に僕以外で入って来るのは、たった一人。

……うん、そうだよね。

僕には花奈が居る。

初めて、僕に名乗って死ななかった愛おしい人。

僕は、立ち上がる。

「……あれ？ きょーか？」

あの人が、傍に居てやって欲しいと頼んで、僕がそれを受け
た子で。

「きょーかあー！ おつかしいなあ、先に戻った筈なのに」

でも、一番の理由は好きだから傍に居る。

「きょーかきょーかきょーかきょーかー！！」

「ここに居るよ。ごめんね、ちよっとかくれんぼしてた」

罪滅ぼしとも言える好意を、いつまでも君に。

世界を統べようとしている魔王の隣で、死神として。

「かくれんぼ？ …… あ、だったら駄目じゃん、自分から出て来
ちゃ！ めっ！」

「ごめんごめん。僕を呼んでいたから、隠れ続けられなかったんだ
よ」

「きゃー！ さっすがはきょーか、まるで王子様！」
「だったら、花奈はお姫様だ！」

魔王と死神の恋は、実るのかな。

もしそうだったら、ダンテ（神曲の方）もびっくりだ。
そんな、素敵な恋になれっ。

なんて夢見たいな事を思う僕の心は、いつの間にか軋むのを止
めていた。

花奈に会えたからかな。
だったら良いなっ。

「きょくか、会議ばかりで疲れた〜！」

「それじゃあ、もう寝よつか。明日も早いからね〜」

「うん！ 寝る寝る〜」

言いながら、花奈は僕に抱きついて来た。

仕方の無いお姫様だ。

思いながら僕は、身体力を抜ききった花奈をお姫様抱っこに持ち替えて、ベッドへと向かう。

そして、僕らは眠りにつく。

また明日、多くの罪を犯す為に。

だから、まだ死ねないよ。

僕のせいで死んで行った人達に直接謝りに行くのは、まだ先になりそうだ。

だから僕は、内心で呟く。

ごめんなさい、と。

次いで、最後は花奈に告げる。

お休み、と。

第五話：魔王と死神（後書き）

えと、どもーIzumoです。

初めてお目に掛かる方は、初めまして。

知っている方は、お久しぶりです。

久しぶりの新作です、はい。

さて、前書きにありましたリハビリの意味ですが、

作者の報告にあつた、原稿消滅事件以来、全く書く気が起きず、

数ヶ月経ってやっと書き始める事が出来、しかしながら文章力が多少低下を感じ取ったので、

新作を書く事によって感覚を取り戻そうと思ったからです。

結果は……見ての通りです。

途中途中に、うる覚えの知識（DNAの容量や量子論など）や近未来的な世界事情を詰め込みつつ、

お得意の変人主人公の一人称視点という形を使用し、なんとか完結しました。

でもまあ、おかげで少しは感覚は取り戻せた気がしますので、

後日より、フラグメントの連載を再開したいと思います。

ともあれ、本作品をご覧になった皆様に、少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

それでは、また他作品でお会いしましょう。
では、また

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2680j/>

隣の魔王(18)は侵略者さん

2010年10月18日21時40分発行